2025（令和 7）年 5 月 21 日
「第 120 回日本方言研究会報告」
発表者：米村雪乃（東京外国語大学大学院博士後期課程 1 年）

本発表では、2025年5月9日に名古屋大学で開かれた日本方言研究会第120回研究発表会の内容に関する報告を行った。日本方言研究会や第120回研究発表会の概要について述べた後、新永悠人氏の「研究協働の新しいスタイルの提案―簡易文法記述に特化した調査票の研究―」をピックアップし、内容の要約と質疑応答の簡潔な紹介を行った。

新永（2025）では、従来専門型（言語現象の下位分野の現象に注目する研究）に比べ総合型（すべての下位分類に注目する研究）の研究が少ない点を指摘した。その原因に、即座に調査を始められる研究資源が少ない点と通言語・通方言的な質問票は個別言語の記述に向いていない点を挙げ、その問題を解決すべく「奄美大島（宇検村）共通調査票」を共有している。この調査票は対象地域が狭く限定されており、即座に調査を初め簡易文法書が作成できるように①簡易文法書の節番号と見出しを予め割り当て、②「調査の意図」を明示し、③そのまま質問可能な内容を示し、④注意点や参照すべき文献の情報も提示されているという特徴がある。

今回の発表ではこうした調査票の共有が方言研究の助けになるという提案を紹介したうえで、今後どのような取り組みが方言研究を活性化させるうえで有意義かについて議論することができた。

参考：

新永悠人（2025）「研究協働の新しいスタイルの提案―簡易文法記述に特化した調査票の共有」『第120回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会. pp.41-48